

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 638 号 平成 25 年 11 月 7 日

「苦海浄土」は過去のものか

水銀といえば、昔は血圧計や体温計、蛍光灯、更には赤チンと呼ばれた局所消毒剤等に使用され、私達にも馴染みが深いものですが、この水銀及び水銀を使用した製品の製造と輸出入を規制する国際条約「水銀に関する水俣条約」が、10月10日熊本市で採択されました。

国連環境計画（UNEP）のアヒム・シュタイナー事務局長は「我々は水俣市と熊本市から出発する。地域社会、産業界も、将来の水銀の世界を考えなければならない」と訴えています（10月12日付朝日新聞）。

水銀というのは、常温時に液体で、水の約14倍の重さを持つ特異な金属です。この水銀は、毒性が極めて強い上に分解されにくく、蒸発して大気中や海、河川、土壤に蓄積されて行きます。そして、水銀に汚染された魚介類を大量に食べた人達に中枢神経が侵されるといふ甚大な健康被害が発生しました。これが「水俣病」といわれているものです。

私は、今から40数年前、石牟礼道子さんのお書きになった「苦海浄土」を読んだ時の衝撃は、今も忘れられません。

当時は、公害問題が厳しく論議されていた時期であり、「苦海浄土」は大きな反響を持って迎えられましたが、この作品はルポルタージュの様に見えて実はルポルタージュではありません。「苦海浄土」は、「水俣病」に苦しむ人々の姿、行政や企業側のありよう、そうしたものをオブラートに包むことなく表出していますが、それは、石牟礼道子さんが観察者としてではなく、自分自身が水俣の人達と同じ世界に住む人間としての叫びの様なものだと感じています。

「水俣病」が公式に確認されたのは、1956年の事です。「水俣病」の歴史はそこから始まった訳ですが、しかし実際は、それよりもずっと以前から水銀は水俣の人々を蝕んでいたのです。

水俣にチッソが進出したのは1908年といわれていますが、以来、チッソは戦前戦後を通じて、我が国の近代化、経済発展に貢献して来ました。しかし、その陰で、環境汚染の問題は置き去りにされて来ました。その付けが、そこで働く労働者や漁民等地域の人々、特に胎児や幼児、老人といった弱者に集中する事になります。

「水俣病」が公式に発見される迄、「水俣病」は伝染病、奇病と呼ばれており、病気を持って生まれた子を隠そうとした患者家族もいたそうです。そういう意味では、「水俣病」の患者やその家族は、病気の為に苦しみ、更には社会から疎外され、偏

見や差別に苦しむという2重3重の苦しみを背負わされて来たのです。

先日天皇皇后両陛下は、水俣市を訪れ水俣病の患者らとお会いになっていますが、その際天皇陛下が、真実に生きるという事が出来る社会を皆で作って行きたいものだと思う、と述べられたそうですが（10月28日付読売新聞）、それは、息をひそめる様にして生きて来なければならなかった患者やその家族の気持ちを察せられての事だろうと思います。

「水俣病」で苦しんでいる人々は、今も沢山います。しかも、まだ補償の対象にすらなっていない人も少なくありません。つい先日、国の公害健康被害補償不服審査会が熊本県の水俣病不認定処分を取り消すという採決をしています。しかし、「水俣病」は決して過去の問題ではありませんし、風化させてはならない問題であるという事を、しっかりと認識しておく必要があります。

国際社会では、「水俣病」が発見されて以降水銀リスクの削減に向けた検討が進められて来ましたが、しかし、現実を見れば、水偽汚染は世界に広がっているといっ

て良いでしょう。国連環境計画（UNEP）の調査によると、2010年の世界の水銀排出量は年間1960トンで、その内の約半分はアジア、特に中国となっています。また、水銀の排出源を見ると、小規模の金採掘37%、化石燃料の燃焼25%で、この2つで6割を超えています。

こうした状況を見ても分かる様に、水銀は発展途上国を中心に多く使われており、水銀規制を実行あるものにする為には、発展途上国に対する経済的、技術的な支援が欠かせません。

日本での水銀需要は1964年の約2500トンピークに下がり続け、近年は約10トン程度といわれています。その一方で、水銀を使った製品や非鉄金属の汚泥から回収した水銀を年間70トンも輸出しているのだそうです（10月11日付読売新聞から）。

日本は、「水俣病」発生以来、脱水銀の技術開発を進め、使用量の劇的な削減に成功していますが、一方では、余った水銀の輸出国であるという矛盾を抱えています。その上、条約発効後は、水銀を使用した製品の製造・輸出入は2020年以降原則禁止となりますから、水銀の需要は格段に減少しますので、これ迄の様に余った水銀を外国に輸出する事も出来ません。従って、余った水銀を如何に安全に保管管理するかという事は事、日本にとっても重大な課題となるでしょう。

水俣という地名が付された条約が締結された今こそ、日本は地球の環境問題に対して積極的にイニシアティブを取るべきであり、世界の国々はその事を期待している筈です。

日本は、公害先進国であった為に、様々な環境技術を磨いて来ましたが、その日本が、先進的な環境技術を以て世界に貢献し、信頼と尊敬を受ける国になる事を夢んでいます。（塾頭：吉田 洋一）